

「あとがき」部分の初校ゲラの一部

言わんばかりの伏線などは伏線の名に値しないかもしれないということを考えれば、こういう気づきにくい伏線こそが本当の伏線なのではないだろうか？ 「回収」されるまで、だれも伏線だと気づかないような伏線である。しかも、この伏線は、一七年版の『かがみの孤城』の最大のポイントというべき結末につながる伏線であって、ちよつとしたいわゆる「小ネタ」による読者や視聴者へのサービスなどというレベルのものではなく、そういう意味でも ~~×~~ 重大な伏線であり、これが、本来の伏線というべきものだろう。

本文でも触れたことだが、『かがみの孤城』一七年版の終盤での記憶の流入場面は、アニメ映画『君の名は。』（新海誠監督、二〇一六年公開）の後半での、三葉の記憶の瀧への流入シーンを連想させる。しかし、『かがみの孤城』一七年版のSF的な構造につながる重要なアイデアの萌芽は、二〇一四年に、連載版の最終回ですでに登場していて、それは、アニメ映画『君の名は。』の公開よりも前である。本書第一章での、『かがみの孤城』一七年版の連載版との比較検証には、そういうことを明らかにするという意味もあり、実際、『君の名は。』との関連、つまり、歴史的なつながりは、雑誌連載時の『かがみの孤城』を調べようとした筆者の当初のひとつの大きな関心事であった。